

# 税理士の ひとりごと



No. 151

放任主義

税理士 齋藤明

高校卒業後、オーストラリアのブリスベンの大学に進学した息子がメルボルンの大学院に行つてからあつという間に3年半が経ちました。我が家は、子供のやることに口出しをしない方針なので、いつ博士号を取得することができるのか?とか、将来いつどこに就職をするつもりなのか?とか、まったく聞いていなかったの、息子から別件でLINEが来た時に、ついでに聞いてみたのです。

すると驚いたことに、既に博士論文の提出を終えて、後は学位が授与されるのを待つだけだと言うではありませんか。ん? ということは、間もなくメルボルンからいなくなる可能性があるらうってことか?と確認したところ、「その可能性は大いにある」と言うのです。それを聞いて、まだ一度もメルボルンに行つたことのない私は、確定申告が始まったばかりのタイミングであるにもかかわらず、直ちに航空券を取得し

メルボルンへと向かいました。

息子と相談のうえ、せっかくだからメルボルンだけではなく、そこから少し南にあるタスマニアに行つてキャンピングカーでキャンブ旅でもしようかということになり、準備万端整えて「さあ、行くぞ」というタイミングで息子から「急遽、カリフォルニアの大学の研究室から招待を受けたから行つてく」というので、期せずして前半の3日間は私の一人旅となつたのです。

息子と久しぶりに積もる話をしたかった私は少し落胆しながらも、その一方で「ラッキー」と思っていたのです。というのも、いつの頃からか、多分「他人(家族も含めて)のことなんて分からないよ」と思うようになった頃からつとに、私は一人旅を好むようになっていたからです。

一人旅は、旅先で起こる面倒事はすべて自分で処理しなくてはならないし、特に食事の時に話をする相手がいない

